

挨拶

学校長 村上英治

お早ようございます。本日は、素晴らしい秋晴れの下、遠くは北海道からお越しいただいたことをお伺いしておりますが、私どもの中等教育研究協議会に御賛同いただき、こうして大勢の方々がお集まりいただきましたことを私ども当事者と致しまして本当に嬉しく存じております。今またお忙しい所を飯島学長と江藤学部長からもこうした研究協議会を持つことの趣旨につきましてもの御挨拶をいただいておりますし、また本研究協議会に関しましては、今年度初めてでございますが、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会からもこの趣旨に御賛同いただき、御後援をいただくことになりましたことも、私ども、この会を盛り立ていただくことになることと存じまして、ここに厚く感謝申し上げます。

江藤学部長からも申されましたように、教育臨調の動きの中で、山積みする教育の今日的課題というものに、私ども名古屋大学と致しましては、飯島学長以下鋭意取り組んでいる訳でございますが、中でも、この中等教育の問題に関しましては、やはり様々な意味におきまして、学校内においても、学校外におきましても色々な問題をはらんでいることはあらためて申すまでもない訳でございます。新しい内閣が誕生致しまして、やはり教育というものを一つの国是としながら、臨調に問いかけつつ、新しい方向性が芽生えてまいりますことを心から期待したいものの一人でございますが、本当に私ども教育の当事者にあるものとして、今まさに打って一丸として、この教育の危機を乗り越えて行くべき時期に当たっていると考えております。その時におきまして、ここでこのような研究協議会を「生徒の学習意欲を高めるための様々な工夫——生徒一人ひとりを大切にする学校づくりの中で——」という副題の下で、ささやかではございますが行ってまいりました、これまでの研究成果を報告申し上げて、色々と皆様方の御助言を得たり、御示唆をいただくことによりまして、私どもの教育の明日への活動に新しい励みが与えられればと心から期待している次第でございます。

御存知の方も多いかと思いますが、私どもの学校は中学校2学級、高等学校3学級、全部で15学級、660名の小規模学校でございますし、中・高併設とい

う形をとる、文字通りの一体となった学校と言っても良いかと思えます。中学校あるいは高等学校にそれぞれ形式的には配置されておりましたが、先生方も全く中学校の先生が高等学校を、高等学校の先生が中学校を、中・高一体の形で色々と教育活動・実践活動を共同で進めております現状だけに、一般の中学校あるいは高等学校とは違った特殊性をかなり担っていることは現状でございます。中学は義務教育の段階ですし、希望者全員出来るだけ選抜することなく入学せしめたい、こういった形で選考に当ってはほとんど抽選に頼っておりますし、そして入学してまいりました中学生を、卒業するに当たっては、高等学校としては一学級人員が多い訳でございますが、全員やはり出来るだけ入学せしめて行きたい、こういった基本の方針を堅持しながら進めてまいっておりますので、実際には高等学校の生徒の多様化・多層化ということが、他の学校と違ったかなり広い巾を持って現実となって来ております。高等学校の先生方が、子どもの一人一人を大切にしながら学習意欲を高めて行くためには、今まで以上に多くの努力を結集しなければならない、ということが実際面で起こってまいりまして、とくに教科指導の面においてこの点が強調されているわけでございます。私ども、今日このような高等学校の生徒の多様化・多層化にどのように対応して行くのか、そしてその中で、なお一人一人を大切にする教科学習をどのようにすすめて行くかということ、今日の時点の中では色々と考えてまいりたいと思っております。

実質的には新しい学校教育のあり方、中等教育のあり方そのものを考えてまいります上に、新しい方式が色々もられていかなければならないことは、特にこの種の個性を尊重するという形で進められてまいります限り、何よりも要請するべきことだと思ふ訳でございます。私自身、これは中等教育ではございませんが、先日、愛知県の知多郡にあります東浦町荻川小学校を見学する機会を得たことがございます。これはTVなどでも紹介されたことのごさいますオープン・スクールを標榜する学校でございますし、そこでは「適性に応じ自ら学ぶ学校生活の創造を求めて」をスローガンに致しまして、あるいは「はげみ学習」とか「週間プログラム学習」などを通して、総合的学習に焦点

をあてながら、こどもたち自身の成長・発達を促す手だてを懸命に探っていくとする学校経営のあり方に、その訪れました時の私は極めて深い感銘を受けた訳でございます。中でも小学校5年生、6年生を対象に致しまして、あるいは総合学習の単元として、「いのち」とか「生きる」とかそのようなトピックスで構成されている体験的・活動的なプログラムがありますが、まさしく人間関係の認識を目標に置きましたので、今、ここで私達が意図しようとしてまいります、生徒一人一人を大切に、学習意欲を本来的に彼ら自身が持っております内発的動機づけとして高めて行こうとする、その視点に即して極めて重要な方向づけを持つものではないかと私自身考えている訳でございますが、これらの方向性を受けて中等教育の段階でも、あるいは中等教育自身を従来の学校方式の中での伝統的な教授形式というものにこだわることなく、かなり開発的な方向性を打ち出すことが、私どものような国立大学の附属学校においてはもっともっと検討されて良いのではないかとおもうのであります。私どもの学校の中で、もちろん今日、このような努力にまでは至っておりませんが、今後の方向づけとして、私は猪川小学校での教育実践を垣間見る機会を得ましたことを契機に、改めて学校の中でも問いかけて行きたいと考えております。そこでは本当に適性に応じて自ら学ぶ学校生活の創造ということがスローガンとしてかけられているわけでありまして、もちろん適性と言っても、見方、考え方の違いによりまして様々の理解の仕方の違い、あるいは、それぞれの子どもたちの習熟度の違い、あるいは、精神的・性格的な違いによる学習方法の様々なあり方など、色々な側面がありまして、その定義も確かに一つの課題であります。あくまで私自身はそれらを集団としてかかわる中で、子ども一人一人がどのように個として変容して行くか、そうしたものをもっとも追求して行くことによって生徒自身の学習意欲を高めて行きたい、このような方向性を打ち出したと思っております。

それはまさしく教師の側に立ちますとき、教師自身の指導の個別化の問題なのであります。学習する主体としての生徒の側に立ちます場合には、これがそのまま学習の個性化ということで対応されて行くことではないのでしょうか。まさしくそこでは自ら学ぶということが意図されてまいります。自ら学ぶということ、これはまさしく自分自身が自ら追求しようとする意欲を持つことが前提とされなければなりません。自学という単なる文字面での形態をいうのみではなく、そこには自ら学ぼうとする、内から生まれ出て来る場所の意欲、そうしたものが存在すること、それに我々はいくら多くの強調点を起きたいと考えます。

外からの様々の教育指導ということも、もとより教育活動の中で重要ではありますが、私自身、臨床心理学を専攻してまいりました者の一人として、より内的な主体的な豊かな個性を担った人間形成の企図をはかること、そしてそれを我が校自身の教育目標としてもおります限り、この種の内発的動機づけを引き出す重要な意味あいを、こうした研究協議会によせても、また先生方に多く考えていただきたいと願っております。この種の内発的動機づけ、こうしたものを考えてまいりますのに当って、私は私どもの学校の今年の研究紀要の冒頭に巻頭言として寄せました一つのエピソードを改めてここにお伝えしておきたいと思っております。私自身が大学で現在行っております「障害児者とその家族」と題する特殊講義の中でも、この種の内発的動機づけをそれぞれの人から引き出して行きたいというような思いをこめて語ってまいりました時に、それに答えたレポートの一環として、一人の女子学生がひとつの手記を私に寄せてくれたのを想起してしたためたのであります。その一部をここでも引用しておくことに致しましょう。この女子学生は、ラジオの深夜番組のディスク・ジョッキーをしておりました学生でありまして、色々な意味で現在も放送関係の仕事の続け、確かにそうした面での色々な接触を持っております。彼女が書きましたレポートの一端は次のようなものであります。

………

今ドラマのシナリオを書いているのだ。

一年程前から知りあいのプロデューサーにやっごらんと励まされるままに、何度も脚本を書いては直し、直されては書き、の繰り返しを続けている。

書いた脚本を百とする。

その九十九が金の取れる本としてダメだとする。言うまでもなく、こういう脚本は、使いものにならない。「バカヤロー！ こんな物を何百万、何千万の視聴者にみせられるかッ！」

とほとんどのプロデューサーが、そう叫びながら原稿を引き裂き、屑籠へ投げ捨てるに違いない。

そういう世界である。またそれが本当である。くだらない本を書いた方がいけないに決まっている。

私がお世話になっているプロデューサーはと言うと、やっばりそう叫ぶ人である。

しかしこの人、心の中でしか叫ばない。いつも茶色のサングラスをかけているから、その目の内までは読みとれないが、顔はニコニコ笑っている。

九十九％使い物にならない本を、それを書いた者を前に、全くいつもと変わらずに微笑している。

そして静かに言うのだ。

「この部分はいいいね。とってもいいね」

この部分とはつまり、残りの一%の事である。使いものにならない九十九%のことには、一言も触れない。この部分はいいね、この感覚だよ、と繰り返す。

それは、一見優しさに溢れた言葉のようだが、とんでもない、すさまじい言葉なのである。

<俺は君を殺さない>そう言っているのだ。原稿を引き裂いて肩籠へ捨てたら、君はここを出た後、地下鉄のホームから電車で飛び込むよね。ハイ、サヨナラ——って。あゝ、いい気持ちよ——って。でもそうなったら、君、一%はどうなるの。この一%はいいんだよ。紛れもなく君から生まれたものなんだ。その一%が百%になったら、面白い脚本になるじゃないの。電車で飛び込むのは別の機会にも出来るじゃない。ね。今日は、家へ帰って、もう一度机に向かいなさいよ。そりゃ、苦しむでしょうよ。七転八倒し、血ヘドの出るぐらい吐くかもしれない。それくらいしなきゃ、一%が百%にならないんだもの。

でも——百%にしようよ。どんなことがあってもいいから、とにかく百%にしようよ。

静かにプロデューサーはもう一度呟く。

「この部分はいいね。とってもいいね」

.....

引用長きに過ぎたかも知れませんが、私はこの種の視点が、相手の、被教育者の側における内なる動機づけ、内なる意欲を惹きおこす、極めて重要な視点だと考えます。一人一人の個性を、能力を伸長させるために、本当に自ら学ぼうとする意欲を自発的に主体的に育てて行くところにこそ教育指導の本質があると思うのです。

歴史的に見れば、教育指導はジョンズが説く以前には、職業指導の補助機能としての一環を担っていたに過ぎないのであります。しかしジョンズが1950年以降あらためて教育指導の本質を説き、学校生活全般への援助活動だ、とこの様に規定するように致しましてから、教科の指導、学習指導、さらに性格、パーソナリティーの向上をも担った生活指導も包括しての、広く総合的な、いわば全体的な学校生活全般への援助活動として位置づけられていくようになりました。それはジョンズによりますと、あくまでも個人が自分の当面する生活上、学校の中での諸問題を自分で解決すべく助けることであり、言い換えますならば、教育指導とは個人のために諸問題を解決してやることではなくして、相手方が、それらを自分で解決するように援助することだと言うのであります。教育指導の焦点は個人にあるのであって、問題にあるのではない。教育

指導の目的はまさしくこういった自己指導、self-directionの方向に向かって、その成長を促進させることであると強調しております視点がございます。私自身はこのようなジョンズの視点に支えられながら、教育指導をとらえ、本人自身がこのようにして自己開発して行くこと、自己解決を目ざすことを一つの意図としながらも、単なる解決、単純な社会的適応に還元できる性質のものを越え、さらにまたその解決が人間存在のいかなる次元においてなされるかにあるか、常にこれを問いかけるものでなければならぬと思っております。問題解決の次元、それはジョンズの言う、いわゆる自己理解とは、主観的世界に閉ざされた単なる自己知覚の謂ではありません。自己と世界とのかかわりを客観的に認識し、しかも自己を世界内に、時間的に空間的に歪みなく位置づけることなのであります。このようにして、自己、他者の受容が可能となる時に、生活上の様々な問題が自己以外の世界の出来事としてではなく、まさしく自分自身が当面し、自己決意と自己選択によって、自分自身で引き受けなければならぬ自己課題として、自我に包含されてくるのだと思っております。いや、それだけにとどまりません。ジョンズの言う、いわゆる自己指導にもとづく教育指導は、この種の視点を更に深く問いかけてまいります時に、一層深い次元の自己理解へ、更にまた自己洞察へ、自己開示へと導いて行く向上的性格を常に担っているのだと考えます。

シュプランガーは、人間となることの全く新しい次元として、「内的世界の覚醒」ということを取り上げておりますが、私どもの、この種の“一人一人を大切に作る学校づくりの中で”、生徒の学習意欲を高める方向性は、まさしく常に己れの内的成長を内包した自己覚醒と言うことが出来るのではないかと思います。私はここにシュプランガーの、“Erziehung ist immer Erweckung”「教育とは常に覚醒である」、こうした言葉を再び想起しながら、生徒自身の内的覚醒を志向する視点に立って、一人一人を生かす学校づくりを進めて行きたいと考えます。この研究協議会の中で、私どもの活動が、果してそこまで至っているかどうか極めて心もとないものがござりますが、少なくともそうした面を志向する私どもの構えを読み取っていただき、様々の御批判を大方からいただければ有難いと思えます。以上でもって挨拶にかえさせていただきます。有難うございました。